

急性期と在宅の橋渡し役として2014年に新設された地域包括ケア病棟は、亜急性期病棟からの転換を中心に全国の病院で導入されている。地域包括ケア病棟は急性期病院等からの患者の受け入れ(post-acute)、在宅療養あるいは介護施設等に入所する高齢者の急性疾患患者の受け入れ(sub-acute)、在宅復帰支援の3つの重要な機能をもつ。そして、何よりも入院リハビリテーションが初めて包括報酬となった病棟体系でもある。新設から2年が経過したため、病棟が地域のなかでどのような役割を果たし、理学療法がどのように提供されているかを知る特集を企画した。

■地域包括ケア病棟を検証する(藤森研司論文)

2014年度診療報酬改定で新規に設定された地域包括ケア病棟入院料ならびに入院医療管理料であるが、地域医療構想の推進と相まって、その規模の拡大と機能の充実が期待される。本稿ではこの入院料が導入された背景、期待される3つの機能、導入約1年後の現状について厚生労働省の入院医療等の調査・評価分科会資料をもとに解説する。

■地域包括ケアシステムと地域包括ケア病棟(宇都宮 啓論文)

地域包括ケアシステムが推進されるなか、2014(平成26)年度診療報酬改定において地域包括ケア病棟を創設した。これは急性期と慢性期や在宅をつなぐのみならず、多機能を有することにより地域の多様な状況に柔軟に対応できるようにしたものである。この病棟ではリハビリテーションを包括したが、リハビリテーションとは本来、在宅復帰などのアウトカムで評価されるべきものであり、報酬に左右されることなく専門職として地域包括ケアを牽引していかれることに期待する。

■都市部における地域包括ケア病棟(小磯 寛, 他論文)

地域包括ケア病棟は、地域包括ケアシステムにおいて医療と介護・地域との架け橋となることを期待されているが、その機能は地域特性に応じた柔軟性を持ち、地域にとって使い勝手のよい病棟であることが望ましい。東京都では、後期高齢者の急速な増加や高齢者の孤立などが今後の課題として挙げられ、都内の地域包括ケア病棟ではこれらの問題を意識した運営が重要となるが、一例として荏原病院の取り組みを紹介する。

■地方地域中核病院における地域包括ケア病棟へのリハビリテーション科としてのかかわり(三浦豊彦論文)

本稿では高齢化率日本一の秋田県にある地域中核病院で地域包括ケア病棟へリハビリテーション科としてどのようにかかわっているかを述べる。病棟専従者には病棟との連絡・調整などを行うことも求められる。課題としては、必要とされる単位数をスタッフの休日の確保と同時に行うことである。また、患者のモチベーションや一般状態の悪化などによりリハビリテーションを提供できないなどの問題もある。

■循環器疾患専門病院における地域包括ケア病棟(湯口 聡, 他論文)

循環器疾患患者の割合は、今後増加してくることが推測され、地域包括ケア病棟はさまざまな役割を果たせる可能性がある。心臓病センター榊原病院では、病棟専従理学療法士による多職種との情報共有、心臓リハビリテーションを中心とした診療、心不全教育プログラムなどを展開している。しかし、地域連携については解決すべき課題も多く、連携を強化する取り組みを進める必要がある。